社会委員会通信

№ 18　2004.11.7

発行：横浜港南台教会 社会委員会
〒234-0054
横浜市港南区港南台 7-8-29
Tel：045-833-5323　Fax：045-833-6616

10 月３日(日)の社会委員会学習会は、今年度当初の計画通り、「パレスチナ問題」についてでした。６月はパレスチナのビデオ上映を行いましたが、今回は講師をお招きすることによって、より深く学ぶことができたと思います。

私たち、社会委員会ではパレスチナ問題の学習会はぜひとも行いたいと考えていたことでした。イエス・キリストの誕生物語として描かれるベツレヘムに、私たちは深い憧憬の想いを抱きますが、現実のベツレヘムはイスラエルによって占領されているのです。パレスチナは、遠くて近い場所のように感じられてなりません。

今回は、パレスチナに詳しい講師として、岡田剛士氏に講演を依頼することができました。お忙しい時間をぬって、私たちのために準備をし、お話してくださった岡田さんに感謝いたします。今回は講師にお話をしていただいたので、理解が難しいパレスチナ問題を、分かりやすく解説していただきました。参加者からは、「パレスチナ問題に強くなり、勉強になった」という意見もでました。詳細は本紙をお読みいただきたいのですが、概論的なところから今日の問題まで、詳しく講演をしていただきました。また、講演の途中、秋吉牧師による解説もありました（旧約聖書のアブラハムと出エジプト、イスラエル建国)。

残念ながら参加者は 21 名と少なかったのですが､大変充実した時間を過ごすことができました。パレスチナ問題に関しては、今後も継続して学ぶ課題であると考えています。

（社会委員長：Ｋ.Ａ）

学習会 講演要旨：「パレスチナ問題」

講師：岡田　剛士
（パレスチナ行動委員会・派兵チェック編集委員会）

◆中東・パレスチナの状況

ここ数日の間もガザ回廊でイスラエル軍によるひどい攻撃が続いていて、パレスチナ人が何十人も殺されています【注１】。

1993 年９月 13 日にワシントンでオスロ合意が調印されました。当時のイスラエルのラビン首相と PLO（パレスチナ解放機構）のアラファト議長が握手して、歴史的な和解と言われました。ここからパレスチナ暫定自治が始まりました。当初はいろんな意味で期待が集まりましたが、だんだんとオスロ合意の矛盾が明らかになっていきました。

2000 年７月にキャンプ・デービッド２交渉が延々とあったのですが、これもうまくいき

ませんでした。同年９月に当時は右派リクード党の党首だったシャロンが護衛を大勢引き連れて、イスラームの聖地（東エルサレムの旧市街にあるハラム・アッシャリーフ）を訪れました。そこはユダヤ教の「神殿の丘」のあった場所であるから、ユダヤ人は足を踏み入れる権利がある、というのがシャロンの主張でした。でも、そんな言い分は、パレスチナ人たちにしてみれば、挑発行為でしかありません。抗議するパレスチナ人たちにイスラエル軍が発砲し、そこから「第２インティファーダ」が始まるわけです。最初のインティファーダは 1987 年から始まり、91 年の湾岸戦争の間にひどい弾圧があって一応終息させられるわけですが、2000 年９月から第２のインティファーダという形でパレスチナ人たちの闘いが始まりました。

2001 年「9.11」を受けてのブッシュの「対テロ世界戦争」に便乗したシャロンは、パレスチナに対して全面戦争を開始しました。ブッシュの戦争は、アフガニスタン、イラクと続き、去年４月にはアメリカ・ＥＵ・ロシア・国連の４者で和平に向けての「ロードマップ」が提示されましたが、うまくいっていません。今パレスチナ人たちは非常に困難な状況に置かれていると思います。分離壁の建設の継続もそうだし、シャロンによる「ガザ回廊からの一方的撤退案」もかなり危うい内容を含んでいます。

イラクについては、去年の５月１日にブッシュは「主要な作戦行動は終わった」と宣言しましたが、いまだにひどい状況です。10 月 13、14 日に復興支援会議を日本でやるということになっていますが、一体どうするのでしょう。来年１月にはイラクで選挙が行われる予定ですし、シャロンの一方的撤退案に従えば来年末までにはガザから撤退すると言っていますが、どうなるのか分かりません。

「9.11」は大変なことだったと思いますが、「テロリストは絶対的に悪い。だから、たたきのめさなければならない。テロをたたきのめすことが正義なのだ」という論理に世界中が被い尽くされているという気がします。

イラクのことに少し触れます。ここ数日間、サマーワでのテロリスト掃討作戦ということで米軍とイラク暫定政府のイラク軍が攻撃をしていると報道されています。これは去年、「ジャパン・タイムズ」紙に載っていた写真ですが、ビルの２階のバルコニーに土嚢が積まれ、機関銃を構えたアメリカ兵が２人監視しています。そのバルコニーにアラビア語で何か書かれていますが、その上に板を張り付けて別のアラビア語が書いてある。それは「人民警察センター」という意味です。去年イラク軍もイラクの警察も政府も壊滅した。その代わりに新しい、占領軍であるアメリカがお膳立てをして軍隊や警察を作り始めた。つまり「旧イラク国家の警察ではなくて人民の警察なんだ」という建前の名前をつけているわけですが、それは真の民衆の手によるものではなくて、占領軍の都合の良い警察だと思うわけです。アメリカ軍がそれを守っていることに、それが象徴的に表されている写真です。

ファッルージャ、あるいはバグダードでも、アメリカ軍の意向に沿った軍や警察の施設に対して爆弾攻撃が続いています。フセイン体制が粉砕された後、新しく生まれた人民の警察やイラク軍だと言われても、本当にイラクの人々から支持されているものなのか、疑問に思わざるを得ません。

マーゼン・ダアナさんというロイターのカメラマンが、去年８月に米軍の戦車から銃撃を受けて殺されました。取材中に担いでいたテレビカメラが、ミサイルを担いでいるよう

に見えたと米軍は言っていますが、それで殺されてしまいました。実は、彼はヨルダン川西岸地区ヘブロンの町で生まれ育ったパレスチナ人でした。ヘブロンは、イスラエルの入植者とパレスチナ住民との対立、そしてイスラエル軍の弾圧が続いている場所です。彼はロイター通信社のカメラマンをやっていて、ヘブロンの町の状況を世界中に伝える仕事をしてきました。イラク戦争が始まって、ロイターから３ヶ月間イラクでの取材を頼まれ、間もなくその期間が終わるという時に米軍の戦車に撃たれ、殺されてしまったのです。

ヘブロンには奥さんと小さな子供たちがいて、その知らせを受けて、そこでまたパレスチナ人たちが新たな悲しみと怒りを抱くわけです。彼が殺された場所は、その数ヶ月あとにアメリカ軍の虐待で有名になったアブー・グレイブ刑務所の脇でした。１人のパレスチナ人が、生まれ育ち住んでいる占領下に置かれ続けた自分の町の状況を伝える仕事をしてきて、たまたまイラクという別の軍事占領下の実態を取材に行って殺されてしまったわけです。

彼がジャーナリストだったので、多少なりともそういうエピソードも伝わってきて、それで僕たちは知ることができるわけですが、イラクやパレスチナで普通に住んで暮らしている人たちが大量に殺され続けているのです。少なくともそのことを忘れたくないと思うわけです。

◆様々な「国」

レジュメに「国」とか「国家」とか、「国民」とか「人民」などと書きましたが、和英辞典、英語／アラビア語辞典、アラビア語／英語辞典などで少し言葉を調べてみました。

日本語で国家とか国民と言います。英語ではnationとかpeopleになります。英語からアラビア語を引くと、例えばcountryはバラドゥ、ワタン、シャアブ、ウンマなどという語が出てきます。landはアルドゥ、stateはウィラーヤ、nationになるとウンマ、シャアブ、カウムとか出てきます。逆にアラビア語から英語を引くと、バラドゥはcountry, town, city, community など、ワタンは homeland, home country, fatherlandなどです。ワタンとワタニーヤ(nationalism, patriotism)は、同じ語根からできた言葉です。アルドゥはearth, land, region, area, ウンマはイスラームでは宗教を基盤とした共同体を指しますが、nation, people, generationもウンマの意味として辞書に出てきます。シャアブはpeople, nation, tribe, raceです。

こうして見ると、何となく傾向として、システムとしての国家を指す場合と「おらがクニ」みたいに言う場合の感じが重なっている部分とずれている部分が、日本語でも英語でもアラビア語でもあると思います。

そして、カウムは tribe, race, people, nation ですが、カウミーヤ（nationalism, nationality)、またムカーワマ(resistance, struggle）などの単語も、みな同じ語根からできた言葉です。

今イラクで反政府勢力とかテロリストというような言われ方をされている人たち、あるいはパレスチナ人たちも含めてですが、アメリカ占領軍やイスラエル軍に対して抵抗するという意味で、自分たちの闘いをムカーワマと言っていると思います。つまり「国家システム」という意味ではないかもしれないけれども、一つの地域や場所に生きている自分たちがカウムであり、その人々によるムカーワマだ、そういうふうに考えているのだと思います。それをブッシュのように、全部テロリ

ストだみたいなふうに簡単にとらえてはならないと思います。

◆アラブ人／イスラーム教徒／ユダヤ人／ユダヤ教徒……

レジュメに、「アラブ人／イスラーム教徒／ユダヤ人／ユダヤ教徒……」と書きましたが、日本語ではユダヤ人とユダヤ教徒という言い分けができます。ところが英語では両方とも Jew, Jewish です。別の言い方もあり得るとは思いますが、普通英語で Jew, Jewish と言った場合、ユダヤ人のことを言っているのかユダヤ教徒のことを言っているのか分からない場合があります。中東とかパレスチナ問題ではそこのところを切り分けておかないといけない部分があるのです。それはなぜか？　普通､アラブ人という言い方をします。アラブの人々の側では、アラビア語でものを考え､アラビア語をしゃべる人をアラブ人だ､と考えます。そういう人たちが住んでいる場所をアラブ世界と言うわけです。

こうしたアラブ世界には、例えばシリアという国家（シリア・アラブ共和国）があり、そこに住んでいるのはシリア人だと言うことができますが、同時にアラブ人でもあるわけです。基本的にはイスラーム教徒が非常に多いわけですが、中にはアラブ人のキリスト教徒もいます。さらに少数ですがユダヤ教徒もいるのです。僕が住んでいたシリアの首都ダマスカスでも、その旧市街にアラブ人のユダヤ教徒が住んでいる一角がありました。

1948 年、ヨーロッパのユダヤ人（Jewish）の移民たちが造ったイスラエルという国家ができました。そのことに周辺のアラブ諸国は反発して第一次中東戦争が起きました。その時アラブ諸国に住んでいたユダヤ教徒（Jewish）のアラブ人の中には、イスラエルに移住した人たちがいました。イスラエル建国の影響を受けて、アラブ人のユダヤ教徒たちが弾圧されることもあったと聞いたことがあります。あとで出てくるモルデハイ・バヌヌさんという人は、モロッコのユダヤ教徒でした。

このように、アラブ人と言った場合には、そこにはユダヤ教徒もいればキリスト教徒もいます。では、ヨーロッパでユダヤ人と言った場合はどうなるか。ヨーロッパではユダヤ人に対していろいろなことが言われてきました。有名な人もいます。アインシュタインとかマルクスとか、音楽のほうではボブディランとか、サイモンとガーファンクルなどもユダヤ人だと言われています。ユダヤ人と言われている人たちが皆ユダヤ教徒かと言うと、そうではない。英語で言うと両方とも Jew, Jewish になってしまうのですが、ユダヤ人のことを言っているのかユダヤ教徒のことを言っているのか、そこをしっかり分けておかないと話がおかしくなります。アラブ人のユダヤ教徒と言う場合、間違えるとアラブ人のユダヤ人になってしまいます。アラブのユダヤ教徒はもちろんアラビア語をしゃべるわけですから、当然アラブ人です。けれども宗教としてはユダヤ教徒です。アラブだけれども、宗教に基づく部分では、生活文化が多少違ったりするということです。

◆１枚のコインから

そろそろ概論に入ります。レジュメに「1 枚のコインから」と書きましたが、ここにコインが３枚あります。英語で Palestine と書いてあります。アラビア語とヘブライ語でもパレスチナと書いてあります。1927 年、1935 年のコイン、つまりイギリス委任統治時代のコインです。そしてヘブライ語では「エレツ・

イスラエル」とも書いてあります。エレツはヘブライ語で土地の意味です。これは旧約聖書の言い方でもあるのでしょうが、「イスラエルの地」ということで、今でもシオニストたちはそういう言い方をします。今に引き続くパレスチナ問題の一端がこのコインの表記に表れていると思います。

ここで歴史について少し話したいと思います。お手許の年表は奈良本英佑著『君はパレスチナを知っているか』から写したもので、1517 年から始まっています。今のパレスチナ／イスラエルのあたりはずっとオスマン帝国の領土の一部で、19 世紀の終わりにヨーロッパからユダヤ人の入植が始まりました。シオニズムの考え方に従ってオスマン帝国の一部としてのパレスチナに移民が始まったわけです。1897 年に第 1 回シオニスト会議が開かれ、「ユダヤ人の郷土」をパレスチナに造るという方針が決まりました。

1914 年に第 1 次世界大戦が始まり、オスマン帝国は連合国に宣戦布告します。この戦争中の 1916 年、サイクス・ピコ秘密協定でイギリスとフランス、ロシア、イタリアによってオスマン帝国の分割が決められます。その一方で、1915 年 7 月から翌 16 年 1 月にかけてやりとりされたフセイン・マクマホン書簡というものがありました。イギリスが、アラブ人たちに協力を求め、これに協力すれば戦後にアラブの独立を認めると約束したわけです。映画「アラビアのロレンス」は、このフセイン・マクマホン書簡に沿う形で起こされたアラブの反乱が題材になっていました。もう一つはバルフォア宣言です。ここでイギリスは、ユダヤ人が戦争に協力すれば、戦後「ユダヤ人の民族的郷土」をパレスチナの地に造ることを認めると言ったわけです。

イギリスは、アラブには独立を、ユダヤには「民族的郷土」の建設を約束し、更にフランスとはこの地域を分捕り合おうという取り決めをするわけです。互いに矛盾した約束をして戦争に協力させ、結局はオスマン帝国が敗れた後で、秘密協定に基づいてイギリスとフランスがこの地域を分割して植民地にしてしまいました。その時にパレスチナ地域はイギリスの委任統治という一種の植民地になりました。

年表に 1920 年サン・レモ会議とあり、「シリアの分割とパレスチナに対するイギリスの委任統治決定」とあります。「フランス軍ダマスカス占領、アラブ政府を滅ぼす」とありますが、このアラブ政府というのは、例のロレンスがイギリスからの軍事顧問として参加してできたのですが、ごく短期間のものでした。

1922 年に国際連盟がイギリスの委任統治とバルフォア宣言を承認します。第 1 次大戦が終わってパレスチナ地域は、オスマン帝国の一部分からイギリスの植民地支配下に入りました。1948 年の第 2 次世界大戦の後まで委任統治時代が続きます。先程のコインはこの委任統治時代のものです。コインに書かれているヘブライ語の「エレツ・イスラエル」は、シオニストたちのイスラエル建国という希望に配慮した表記だったのかもしれません。このコインを僕はシリアで買ったのですが、1948 年か 1967 年の中東戦争でパレスチナ人たちが難民になって周辺のアラブ諸国に出て行った時に持っていたコインではないか、などと想像しています。

イギリスの委任統治の間にヨーロッパからはユダヤ人たちの入植がどんどん続き、一方でそこに住むアラブ人たちの反イギリスと反シオニズム、それに自分たちの独立に向けた闘争がずっと続いていきます。今のイラク方式と言うと変ですが、爆弾でイギリス軍の本

部を破壊するというようなことを当時のシオニスト・ユダヤ人の右翼武装組織が行ったり、アラブ住民とユダヤ人移民の衝突事件（例えば1929年の「嘆きの壁」事件）など、いろいろなことが起きました。イギリスの委任統治は、どんどんと破綻していきました。

1947 年に国連でパレスチナ分割決議案が採択されます。この決議案はイギリスの委任統治は止めて、ユダヤ人のための国とアラブ人のための国に分けて、エルサレムは国際管理下に置くというものでした。しかしゴタゴタは続きます。翌48年にイギリスはサジを投げて引き揚げ、ユダヤ人たちが一方的に独立を宣言します。周辺のアラブ諸国はこれを承認することなど不可能ですから、このパレスチナの地に攻め込んで、第１次中東戦争が始まるわけです。イスラエルの側ではこの戦争を独立戦争と呼び、アラブ諸国の側ではパレスチナ戦争と呼んでいます。

アラブ諸国は戦争を仕掛けたけれども敗北しました。イスラエル建国と第１次中東戦争を契機として、70 万人、あるいは 90 万人といわれる多数のパレスチナ人が難民となりました。これが今に続くパレスチナ問題の大きな要素になっているわけです。

◆「隣人」としてのパレスチナ人

パレスチナ人たちは何を求めているのか？「パレスチナ難民の帰還の権利」と「民族自決権」、そして「東エルサレムを首都とするパレスチナ独立国家の樹立」です。この三つが、パレスチナ人がずっと要求し続けてきたポイントです。

「帰還の権利」とか「民族自決権」、「独立国家うんぬん」といった言葉だけを聞くと、日常的な生活実感としては理解しにくいものがあります。でも、戦争で自分たちの具体的な家や土地や財産が奪われて難民になった人々からすれば、そういう大切なものを失うことを強いられたのだから取り戻したい、ということだと思います。それは、人間としての尊厳を回復したいということでもあると思います。奪われたものがあって、人間らしく生きられない。それを彼ら自身で取り戻したいということが「帰還の権利」や「民族自決権」という言葉で表現されているのではないかと思うわけです。

「元いた場所に戻りたいといっても２世代目、３世代目になって若い人たちは、その場所すら実際には知らないのではないか」と言われても、パレスチナ人たちは帰還の権利を実現したいと言うわけです。

僕らは家賃や仕事の都合があっても、住みたいと思う所があったら、大体そこに住むことができます。自分の住みたい所に住む権利、自由に自分が住む場所を選ぶ権利、それは基本的な人権と言ってもよいのだろうと思いますが、パレスチナ人にとっての自分たちが住みたいと思う場所に住む権利、そこがたまたまパレスチナであって、その権利が実現できない、というふうに考えてもよいのではないでしょうか。

パレスチナ人というと、すぐにテロリストだとかいろいろ言われますが、自分たちの基本的な権利や人間らしく生きたいという願いが奪われていることが問題なのであって、その問題を抱えているのがパレスチナ人なのです。特別な人たちではなくて、僕らがしたいと思うことを、同じようにしたいと思っている人たちなのだ、と。人間として当たり前の権利なのに、それがずっと阻まれている。そういう意味では、「隣人としてのパレスチナ人」という言い方はそれほど突飛な言い方ではないと僕は思います。

誰が阻んでいるかといえば、イスラエルという国家です。問題は非常に大きくて、イスラエルの背後にはアメリカの莫大な軍事援助や政治的支援が繋がっています。このアメリカの支援という問題も大きいわけです。

◆「9.11」後のパレスチナからの電子メール

レジュメの３～５ページは僕が英語から翻訳したもので、「何が起こっているのか？どんな地獄が出現しているのか？　自由を求める！」です。ベツレヘムの難民キャンプから発信されたもので、日付は 2001 年 10 月 21 日午後２時です。この年の「9.11」ですが、僕はあのニュースを友達との電話で初めて聞いた時に、「まさかパレスチナ人がやったんじゃないだろな」などと思わず言ってしまいました。たしかに最初の頃、DFLP（パレスチナ解放人民戦線）の犯行説もありました。DFLP は PLO（パレスチナ解放機構）にも参加しているパレスチナ人たちの政治組織の一つです。

誰がやったのかは置くとしても、とにかくこれは大変なことになると思いました。2000 年９月から「第２インティファーダ」といわれる抗議闘争が始まっていたからです。パレスチナ人たちの闘いに対してイスラエル軍はずっと弾圧を続けていたし、「9.11」以後ブッシュはテロに対しての戦いだということをすぐに言い出しました。そうした状況から、パレスチナ人に対する弾圧は絶対ひどくなると思いました。実際に「9.11」以降、パレスチナ人に対するイスラエル軍の攻撃は格段にひどくなっていきました。

今はインターネットがありますから、パレスチナの現地からも、いろんな情報やリポートが出されてきます。僕はそれをフォローしなければいけないと思って、向こうからの現場リポートをいろいろと翻訳していました。日本語にして、それをまたインターネットで流すという形です。「9.11」の後、しばらく集中的にやっていました。

この「ベツレヘム　10 月 21 日」も、その中の一つです。「9.11」の直後、ベツレヘムも完全にイスラエル軍の再占領下に置かれました。その時のリポートですが、このキャンプで、26 歳の耳が聞こえない、話もできない青年がパンを買うために家を出たところを、イスラエル兵士に撃ち殺されてしまったという本当にひどい話です。そんなことはいくらでも起こっていると言ってしまえばそれまでですが、こういうリポートも一つの現実として翻訳して、あちこちに流して皆に読んでもらおうと思ったのです。

僕が印象的だと思うのは冒頭の部分です。「ベツレヘムが再占領されて３日目です。私は朝９時に起きて、葬式に行くために着替えをしました」。サラッと書いてあるのですが、再占領下のキャンプの大変な状況の中にあるわけです。砲撃が続いていて、戦車部隊が突入してくる、という状況で書かれたリポートです。なのに、どんなにひどい状況を強いられていても、自分たちは人間らしい当たり前の暮らしを続けていきたい、続けていくのだと言っているのではないか、と思いました。たとえ砲撃に遭っていても、お葬式に行くときは着替えをしてから行くんだ、と言うのです。パレスチナ問題というと大きい話になりますが、例えばこうした文章を読んだ時に、そこに言わば「隣人としてのパレスチナ人」を感じるわけです。

◆シオニズム

臼杵陽著『見えざるユダヤ人』という本にシオニズムについて簡潔な定義が載っています。「シオニズム：シオン（エルサレムにある丘の名前）、つまりパレスチナ（エレツ・イスラエル）に帰還しようとするユダヤ人の思想と運動の総称。シオニズムには労働シオニズムあるいは社会主義シオニズム、修正主義シオニズム、宗教シオニズム、精神シオニズムなど、いくつかの潮流がある」。

ヨーロッパのユダヤ人は、周りからは「おまえはユダヤ人だ」と言われ、自分でもそうだと思っている。一つのナショナリズムと言えると思います。そのヨーロッパのユダヤ人が自分たちの nation state（民族国家、国民国家）を建設しようとするナショナリズム、民族主義の運動、思想です。そこで問題なのは、旧約聖書の「約束の地」のイメージを同時に活用し、それに被せていったということです。

更にややこしいのは、キリスト教原理主義と言われる人たちがいることです。原理主義という場合、最近はイスラーム原理主義を指して言う場合が多いですが、もとはキリスト教原理主義のことを指す言葉でした。キリスト教原理主義者とは、今のイスラエル国家を聖書の預言の実現に向けたステップと考える人たちのことです。つまり、キリスト教徒だけれども、イスラエルに対してシンパシーを持っているのです。一方の側にシンパシーを持てば、当然もう一方の側には嫌悪感を抱く。パレスチナ人はひどいやつだと思っている原理主義者が結構いるわけです。ブッシュもキリスト教原理主義に傾いていると言われています。

また、ヌトレイ・カルタというユダヤ教「原理主義」のグループは、イスラエルの国は神様が造って下さるものであって、人間が建国した今のイスラエル国家は認めないと言っています。逆に、そういう人々もいます。

◆現在のイスラエル国家―「ユダヤ人のための民主主義国家」の破綻

1.その徹底的な軍事主義

今のイスラエル国家は「ユダヤ人のための民主主義国家」だと、イスラエル自身が言っています。そのイスラエルの大きな柱のひとつが軍事至上主義、ミリタリズムだと、僕は思います。イスラエルを紹介するためにイスラエル情報センターが作った『イスラエルという国』という本があります。その中に「IDF〔イスラエル国防軍〕の防衛思想は、戦略レベルで防勢、戦術レベルでは攻勢である。国は戦略縦深を欠くので、必要と判断された場合、ないしは敵の攻撃を受けた場合、直ちに攻撃に転じて敵の領土内で戦闘する」と書かれています。これは防衛戦争というより侵略戦争ではないかという気もします。さらに、「相手方〔この場合アラブ側の軍隊〕と比べ、いつも量的には劣勢であったが、進んだウェポンシステムの配備など、質でこれもおぎなってきた」と続きます。つまり、自分たちは質の良い軍隊を持ち、必要に応じていつでも相手の国に行って戦争するけれども、しかしそれは防衛のためだ、と言うのです。

イスラエルでテレビニュースを見ていると、ビタホーヌという言葉がよく出てきます。ビタホーヌは、安全保障、セキュリティのことです。イスラエルでは安全のためということが全てに優先します。1981 年にイラクの原子炉をイスラエル空軍が爆撃したときも、1982 年のレバノン侵略も、占領地でパレスチナ人を攻撃することも、イスラエルは安全のため、ビタホーヌのためということで正当化するわ

けです。国民皆兵で、男女とも義務兵役に就くことが社会的な当然の責務だとする考え方です。自動小銃を肩にかけて制服で歩いている若者たちというのが、街なかの全く普通の風景です。社会全体が非常に軍事化されているという言い方もできると思います。

その一方で、イスラエル軍の若い兵士たちに「インティファーダ症候群」というものが現れてきました。2002 年にイスラエルの新聞に初めてそのことが載りました。日本の街角で安物のアクセサリーなどを売っている外国の若者をよく見かけますが、あれはほとんどイスラエルの若者です。男性は 18 歳以後に３年間、女性は１年９ヶ月間の義務兵役を終えると、バックパックに荷物を詰めて世界中を旅行することが多いそうです。インドや東南アジアや日本にも来ます。日本には既にそういう若者たちが電話をする場所があって、いろいろ売り物のグッズを手配したり、日本語の簡単な会話メモなどセットで貸してもらえます。指示された場所で店を開き、滞在費や旅費の資金を稼ぐ。そういうルートが既にあると聞いたことがあります。

ところが、そういう若者たちがイスラエルに帰ると麻薬中毒になっていたり、精神的な問題を抱えているケースが非常に多いというわけです。原因を調査したら、バックパックの旅行中に何か問題があったのではなくて、それ以前の兵役中に行ったパレスチナ人弾圧の非道な行為の体験が心に残っていて、海外旅行中にいろいろな形でそれが出てくるということが分かってきました。そのための専門のリハビリテーション施設が造られたという記事があるので、少しだけ読んでみます【注２】。

「一つの部隊の兵士たち全員が治療を受けざるを得なくなってしまったというケースは、１年半前にテロリストの大物イヤード・パタートの抹殺に関係した兵士たちだった」。

ここで「テロリスト」と言っているのは、イスラエルの新聞なのでそう言っているのであって、僕からしたら「パレスチナ人の活動家」なのかもしれませんが、要するにイスラエル軍の特殊作戦としてパレスチナ人に変装してキャンプに入って、政治的な指導者や活動家を殺してしまうということがよくあるわけです。その兵士の発言が次に続きます。

「最初、私たちは抹殺作戦の成功に幸せを感じ、鼻高々でした。切り刻まれた死体を前にポーズを取りながら、写真を撮りました。この人物のちぎれた内臓を手にして笑っている者もいました。数週間後に突然作戦将校がやってきて、私たちを叱責し、これらの写真を手渡せと命令されました。将校はそれを私たちの目の前で燃やし、『こんな写真は２度と撮ってはならない』と警告したのです。自分たちが何をしでかしたのかが分かり始めると、私たちはひどく動揺しました。その少し後に私たちのうちの２人がパーティーに出かけて行って、エクスタシー（麻薬の１種）の錠剤を大量に飲んだのです。２人は完璧に麻薬の効いた状態で基地に戻ってきました。私たちは２人から銃を取り上げ、精神科医がやって来て連れて行くまでの間、２人を部屋に閉じ込めました。２人のうち一方は誰が誰かも全く分からない状態で、ずっと『ムハンマド、ムハンマド！』と叫び続けていました。彼は完全にクレージーになってしまいました。インティファーダが彼を打ち負かしたのです」。

こういう証言がいくつもあります。銃を持って麻薬パーティーに出かけるということ自体がとんでもないと思いますが、そういうことをイスラエル軍の若い兵士たちはやっているのです。かつてアメリカではベトナム帰還

兵の問題がありました。あれも後になって、だんだんとそういう問題があるということが明らかになっていったと思います。今度はイラクに派遣されているアメリカ軍の帰還兵の問題もあると思います。軍事主義が「テロリストは悪いやつだからやっつけろ。殺してしまえ」と言って、やっている側にこうした問題が起こっていることにも、目を向けたいと思います。

２.「ユダヤ人」とは誰のことなのか

「ユダヤ人」のための国家と言う場合、その「ユダヤ人」とは誰のことなのか。今のイスラエルには多民族・多言語という混乱が、現実としてあります。イスラエル初代首相となったベン・グリオンは、イスラエルは「るつぼ」だと言いました。世界各地からやってくるユダヤ人の移民たちが、その「るつぼ」の中で一つに溶け合って新しいイスラエル人が創られるんだというわけですが、全然そうなっていません。例えば 1990 年代にロシアから「ユダヤ人」といわれている大量の移民がきましたが、一つに溶け合っていないで一つのコミュニティを作っていると思います。イスラエルは多民族・多言語の国家になっています。

何年か前、兵役検査の時にアラブ系の出自をもつ若者だけに HIV 検査を秘密で行っていた、ということが暴露されて大問題になったことがありました。ヨーロッパ系の出自をもつ若者にはその検査を実施していなかったので、人種差別だとして大問題になったわけです。このようにイスラエル社会は「るつぼ」の中で溶け合うことなく、ますますバラバラになっているように思います。

去年僕が解説を書いた、ミシェル・ワルシャウスキー著『イスラエル＝パレスチナ民族共生国家への挑戦』（柘植書房新社）という本があります。この本の中で著者は、「ユダヤ人国家と民主国家の間で選択の時が近づいている」と言っています。つまり、イスラエルは建前としてはユダヤ人のための民主主義国家なのに、全然そうなっていない。逆に矛盾はどんどんと大きくなっている。だから、ユダヤ人の国家ということで強引に行くのか、それとも何とかして本当の民主的な方向を目指すのか、その選択の時が近づいていると言っているのです。

イスラエルという国家は、パレスチナ人を軍の力で押さえつけたり、殺したり、痛めつけたりしていますが、更にシャロンは分離壁を造っています。コンクリートのブロックで高さ８メートル、その両側に保安帯を設けるので、広大な場所を必要とします。そんな壁でテロリストの侵入を防ぐなどと、無茶なことを言っています。検問所を何百ヶ所も作って日常生活すら普通に送ることのできない状況をパレスチナ人たちに強いています。それでイスラエルという国家自体はどうなのかと言えば、全くメチャメチャで、本当にどうするのか選択の時が近づいている状況なのだと思うわけです。

３.モルデハイ・バヌスさんについて

次に、モルデハイ・バヌヌさんのことを話します。バヌヌさんはモロッコ系の移民です。つまりアラブ人のユダヤ教徒の家に生まれ、一家でイスラエルに移住したのです。彼はイスラエルの核施設で働いた経験があり、1986 年にイスラエルの核開発の秘密を暴露しました。今イスラエルは核爆弾を 200 発以上持っているだろうと言われていますが、政策としては核保有については何も言いませんし、核拡散防止条約を批准していません。核施設で

働くバヌヌさんは、秘密裏に進められているイスラエルの核開発のことを世界に知らせなければいけないと決意しました。それでイギリスの新聞に資料を付けて公表しました。世界的に大問題になったのですが、それでもイスラエルはいまだに核の有無について何も言いません。

その後、彼はイスラエルの秘密情報機関の手で籠絡され、意識のないまま極秘にイスラエルに連れ戻されて、反逆罪で 18 年の判決を受けました。その 18 年の刑期が終わったのがこの４月です。彼は 18 年の服役中、12 年間独房に閉じ込められていたのです。イスラエル当局は、長い間独房に閉じ込めて痛めつけることで彼の転向を期待したのかもしれませんが、彼は耐えたのです。ところが４月に釈放されても、「外国に行ってはいけない。空港に近づいてはいけない。携帯電話を持ってはいけない。インターネットに接続できるパソコンに触ってはいけない」などと当局から命令され、常に監視されている状態にあります。

レジュメに付けておいたのは「アムネスティ・インターナショナル日本　ひろしまグループ」のホームページのコピーです。彼は、この核施設の事実を暴露する前にキリスト教の洗礼を受けていたそうです。釈放後アメリカ行きの希望があったのですが、行くことができず、東エルサレムの聖ジョージ教会から招かれて、今はそこに滞在しています。

このバヌヌさんの問題が、さっきお話ししたアラブ人のユダヤ教徒で、イスラエルに移住した人の一つのケースです。彼がイスラエルという国の中でどういう位置にいるのか、あるいはイスラエルの核兵器や軍隊の問題など、いろいろな問題が、このバヌヌさんという１人の人間の存在によって示されていると考えることができると思います。

さらにバヌヌさんは、今の不当な制限が取り除かれたら広島には是非行ってみたいと思っているそうです。彼が広島を訪問したら、それはいろいろと感ずるところがあると思いますが、逆に「ヒロシマ」を抱えている僕たちは、イスラエルの核をどう考えるのか、イスラエルの軍事至上主義や若い兵士たちの問題をどう考えるのか、イラクに自衛隊が派兵されているということとも、本当はどこかでつなげて考えなければならないのではないか、と思います。

つい最近、リア・アブ・エル＝アサール著『アラブ人でもなくイスラエル人でもなく―平和の架け橋となったパレスチナ人牧師』（聖公会出版）という本が出ました。著者は、バヌヌさんが今滞在している聖ジョージ教会の主教で、パレスチナ人でありアラブ人なのですが、イスラエルという国家ができてしまったのでイスラエル人でもあるわけですが、そうした彼の自伝です。標題と違ってアラブ人でもありイスラエル人でもある彼の、1948 年以前からの経験が書かれています。いろいろ世界を回り、クリスチャンとしてどういうことをしてきたかが書かれています。翻訳に多少問題がありますが、テーマに関心のある方はお読みになってみたら良いかと思います。

◆今後どうなる？

時間がなくなってきましたが、今後どうなるかについて一つだけお話しします。９月末からイスラエル軍がガザ回廊に侵攻して大変な状況になっています。ガザ回廊は５キロメートル×30 キロメートルくらいの狭い場所です。地中海に面していて砂地が多いですが、ここにパレスチナ人が 130 万人住んでいると言われています。ものすごい人口密度です。こちらがイスラエルで、ここに入植地からの

道があります。この入植地からも道があります。これらがバイパス道路で、イスラエルと入植地を結ぶために新しく造られた道路で、イスラエル軍が厳重に警備しています。

もともとエジプトからこのラファハを通り、パレスチナ人の住んでいる所を通ってもっと北側まで抜けていく古くからの道があります。それと交差するように、イスラエル側が入植地を結ぶための道路を造りました。パレスチナ人たちの住んでいる場所が、これらの入植地とバイパス道路によって四つに分断されてしまっているのです。だからガザ回廊に住んでいる人は、この道路に遮られて、他の場所に行けないのです。逆にイスラエル側はこのようなバイパス道路で入植地と往来できます。

さらに、これと同じことをイスラエルは、ヨルダン川西岸地区でもやっています。入植地とバイパス道路でパレスチナ人が住んでいる地域を切り刻んで、周りからぐっと締め上げるという構造です。1993 年のオスロ合意以降にできてきたパレスチナ暫定自治地域ですら、こうした入植地とバイパス道路で切り刻まれていて、イスラエルの占領地に浮かぶ離れ小島のような状態でした。

今後どうなるかは、分かりません。ただ、それでもなおパレスチナ人たちは何とかして生きてゆこうと努力しているし、イスラエル人たちの中にも、パレスチナ人たちと対話してゆこう、あるいは支援をしていこう、イスラエルの軍事至上主義それ自体にも反対してゆこうとか、そういう動きもあるわけです。そんなパレスチナとイスラエルの現状に注目し続けていきたいし、同時に、それは海の向こうのことではあるけれども、何かどこかで僕たち自身の「今・ここ」ともつながる問題なのではないかという問題意識も持ち続けたいと思っています。ありがとうございました。

★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★

【注】

１：10 月 15 日にイスラエル軍がジャバリア難民キャンプなどから部分的な撤退を開始した。パレスチナ赤三日月社によると、9 月 29 日からの軍事侵攻でパレスチナ人 131 人が殺され、289 人が重軽傷を負ったという。

２：イスラエル紙「マアリヴ」2002 年 11 月５日付の記事（ヘブライ語）の一部がイスラエルの平和運動に参加する人たちによって英訳され、インターネット上で配信された。パンフレット『イラク戦争に反対しよう！』（派兵チェック編集委員会・発行／2003 年２月 15 日）に、この英訳テキストからの翻訳を収録。

社会委員会からのお知らせ

12 月から寿町の支援の物資を集めます。ご協力下さいますようお願いいたします。

◆毛布・防寒着・下着など

◆お米・野菜・調味料・果物など

また、寿町の越冬支援（パトロールなど）にもご協力下さい。